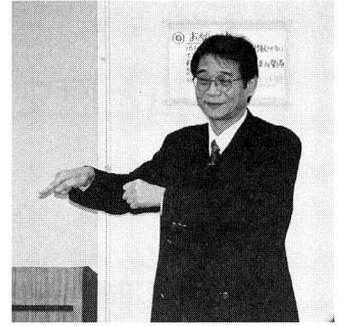


= 入門講座 =

演題「私と歴史散歩 京都聾啞保護院をたずねて」

講師：大矢 暹氏（京都府聴覚障害者協会理事）

手話も出来無い、筆談も出来無い、援助がゼロの状態、何とかして差し上げたいと思って、大変苦しい思いをした事が忘れられません。今まで一週間病院にいました。そしてやっと場所がわかりまして、家に帰る事が出来ました。大津でした。見つかったのは、田辺というところでした。どうやって見つけたかと言うと、この方は、老人ホームで生活していて、時々、自分の家に帰って外泊しては、帰って来ましたが、いつも自分で電車に乗ってひとりで行き来していました。家と老人ホームとの行き来には慣れていました。その日家から老人ホームへ帰り途中の『浜大津駅』で、（この駅は線路が交差していて、乗り換えホームがたくさんあります）乗り換えで慌てていて、乗る電車を間違えたいらしいのです。途中おかしいと気が着きましたが、引き返す方法が解らず、途中で降りて道を歩いているところを保護されました。長い間見つからなかったのは、いつも慣れた帰り道だったので、家族は帰れたものと思い、確認の電話をしなかったのです。施設のほうでは、何か事情があって、まだ自宅にいるのだろう、



両方で、そう思い込んでしまったからでした。普通は1人で帰ったなら、きちんと着いたかどうか、確認の電話を入れるのは、家族として当然ですし、施設としても予定通り到着しないなら、心配で、家族に連絡を取るべきです。その時、身障手帳など身元を証明するものを持っていませんでした。万一の時のため、身分証名のできるものを身に着けさせておくのは当然のことですが、いつも通い慣れた道だから、大丈夫だと思ったのか、持たせていなかったのです。そして双方の思い込みのために、家族からも施設からもほったらかしにされたそうです。十日ほど寝込んで苦しんだ様です。本人のせいではありません。きちんと援助するべき周りの人の責任です。

今から20年程前の話ですが、その事を聞いていたので、将来ろうあ老人ホームを建てたら、そのような事が無いようにきちんと配慮しようと思いました。

話は変わって、今の施設のある場所は京都府の北、綾部市というところですが、京都市から車で北に100kmほど走った山あいにお（暗いと言う手話）野というところがあります。ここはその昔、出雲から文化が入って来たところで、鉄鋼をつくる『たたら場』の残っているところです。

役場と契約した私は、月に一度その地区の聾者の家を訪問していました。そして、聾者から相談されて、役場に何かしてもらいたい事があれば、代わりにお願いする相談員をしていました。

普通は役場では、プライバシー保護のため、聾者の名簿を見せる事はありませんが、最初に役場に言った時に私が説得しました。最初は役場も当然プライバシーと言う事で断って来ましたが、「へえ～プライバシーですか？それならあなたがたが、きちんと役場の仕

組みや、保証や生活支援についてせつめいできるんですか？困っている事が何かきちんと把握して、それにあった援助を説明しておこなうことができるんですか？」と言い、試しに、聞き取りの記録を見せてもらったら、何も書いてありませんでした。「ほら、何もやっていないじゃないですか」と問いただしたのです。それで、交渉の結果、役場から依託契約をして、訪問に行きました。

その時、60歳くらいのおばあさんの家を訪問しました。とても広くて、普通の家よりも立派な家でした。その家にはおばあさんよりもっと年上のおばあさんも居ました。わたしは、身分証名を見せて、役場からの依託で訪問した旨を伝えました。家族からは、「おばあさんは家におりません、来ても無駄、話しも通じませんし、会っても意味がありません。放っておいて下さい。そっとしておいてください。」など門前払いされました。わたしは「ああそうですか」とひきさがるわけにはいきません、なんとか説得して、無理矢理連れ出そうと言うのではありません、顔を見るだけでもかまいませんと言ってなんとか了解をえました。でも家には居ないと言うのでどこにいるか聞くと、田んぼにいるということです、五月の連休のころで、田植えもそろそろ終わるころでした。田植えが終わった後の草取りに行っているらしいのです。家にいるおばあさんに田んぼがどこにあるかわからないので案内して下さいとお願いしたところ、ふきげんそうな顔をしながら案内されました。雨の降る山あいの田んぼには聾者のおばあさんが1人でいました、こんなに山の中の広い田にたったひとりで、蓑(みの) 菅(すげ) の笠(かさ) をかぶって、腰を曲げて草取りをしていました。かがんでいるので、遠くから「おおい」と手をふっても気がつきません。顔をあげてくれるまでずっとまっています。やっと顔をあげたかと思ったら、ついてきたおばあさんが持っていた傘を振り回して、恐い顔をして、上がってこいと合図をしました。傘で叩くようでびっくりしましたが、これがいつもの合図の様でした。「まあまあ、そんなに怒らないで、私が自分ではなしにいきますから、」となだめていると、田んぼから聾のおばあさんがこちらに歩いて来ました。名刺を見せても読めないし、『名前』という手話もわかりません。なんとか身ぶりで通じまして、話しをしましたら、自分の足を指差すのです。彼女は田んぼに裸足で入っていました。何度も足を指差すのですが私は日本語におきかえるとそれが、「足が痛い(冷たい) からもう田んぼから上がりたい」なのか「足が痛いけれど、がんばって1人で仕事をしています」なのか「足が痛いので医者連れて行って欲しい」のか解りませんでした。

見るからに足は水に浸かって冷たそうでしたが、家族でも無い私が「もう止めにして、暖まって下さい」ともいえずにいました。彼女が「足が痛くなるまでがまんしています」といっているのか「足が痛いのでもう止めにしたい」のかもわかりません。とにかく見るからに痛そうなので、連れて来てくれたおばあさんに「できれば、医者に見せてあげて下さい」とお願いしたら、とても恐い顔でにられました。(ああ、この聾のおばあさんはきっと、牛や馬並の扱いをされているんだ) と思いました。一緒に働くならまだしも、1人でこんな仕事をさせるなんて、昭和45年頃から56年ころまでの間です。そんなに大昔の事ではありません。彼女は大変苦勞されたんですね。感心している場合ではありませんよ。皆さんの周りにもこのような人がいるかもしれません。

どうして彼女がこのように虐げられるのでしょうか。同じ家族でも同等にあつってもらえ

ないのでしょうか？そのことを考えて、考えて、私は施設を建てました。そして、各地で虐げられているひとたちを集めて、暖かい生活を送ってもらいたいと思い続けて、ようやく施設を建てることが出来たのです。

さて、彼女の事をきっかけに、ではもっと昔の聾者はどのような生活をしていただろう？いつごろから、聾者がこのように虐げられていたのだろうか？知りたいと思いました。そしてろう学校の先生に相談に行きました。その時ろう学校の先生は本を見せて下さいました。ここにあります。

(板書)『日本聾啞・秘史』伊藤舜一 著(大阪府立生野聾学校校長)昭和15年昔の壺や掛け軸を集めるのが趣味で、聾者関係の物もそのついでに集めていたそうです。内容はちょっと……立派とは言えないのですが、各地の資料を集めてあります。

この中に『小林一茶』という俳人がいます。みなさんも知っていますか、長野県出身の人、内田さんは長野県から来ていますが、「やれ打つな 蠅が手をする 足をする」(ねえ、蠅を叩かないでやって下さい、手や足をあわせて、命乞いをして拝んでいますから)「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」(雀の子どもがみちばたで、米をついばんでいるが、馬が通るよ、踏まれてしまっちはあぶないから、よけなさい)など、弱い立場のものを暖かく見守るような、おせっかい好きのような句がありますね、資料の中に『時雨(しぐる)るや親椀にたたく唾乞食』という句があります。喋れる乞食は家をまわって「食べるものを恵んで下さい」と言って歩くのですが、話しのできない人は代わりにお椀を箸で叩いて恵んでもらっていたのでしょう、秋の終わりのつめたい小雨の降る日にいつまでもその音が鳴っているという句です。そのころ一茶は江戸の長家で貧乏な生活を送っていたと思われれますので、自分と結び付けたのでしょう。

もう一つの資料は、伊藤先生がお持ちの資料で、みなさんも見た事があるかも知れませんが、『和漢三才図会』です昔のA4程の大きさの和紙に描かれた絵付き辞典のようなものです。私が在学中に見せてくれればよかったのにずるいですよという伊藤先生も、大矢が卒業した後で、研究をはじめたとのことでした。

時代は皆さん御存じの『大塩平八郎の乱』の頃です。(わからない?)江戸幕府が『お犬様』といって犬を可愛がった將軍の命令で、犬を殺したりすると、捕まってしまうというおふれが出たころです。(わからない?)江戸時代中期頃のことです。古文で書かれているので、私には読めませんでした。京都の大学で国文学を勉強している人ひ訳してもらいました。

資料参照

昔から盲の人については、様々な職業があり、盲を題材にした本も多く書かれています。聾者をテーマにした本はあまりありませんので、皆さんこれから書いて下さい。聾者の偉人というのはあまり資料が無いですが、例外もあります。吉田松陰の弟に聾者がいた事、明治9年に32才で亡くなっています。

山口県萩市にいました。松蔭の妹の正子が聾の弟の面倒をよく見てくれたとあります。正子は羽織はかまを縫うのが上手だったそうです。また、読み書きを教えるのが得意だったそうです。

乃木將軍の妹が、15、6歳の時、聾者と結婚したという話も、伊藤先生から誰かから聞

いてほんにかいてあります。

田舎と都会でも聾者の扱いは違ったと思います。田舎ですと、田畑を耕すのに聾者は労働力として使われたと思います。又昔日照りで米が取れないと、地主からの取り立てに絶えきれず、百姓一揆を起こしたりしました。そうなると、障害者は流民や棄民といって、食いぶちを減らすため家族から見捨てられたのです。今施設にいるおじいさんも産まれてすぐ捨てられて、家族からは何の連絡も無いずっと施設で暮らしている人もいます。

みなさんのまわりにもそんな人がいるかも知れません。聾啞だからといって捨てられるか、家族から聞こえ無いために話を通じず、暴力を振るわれてつらくて家から逃げたかも知れません。そうやって、乞食になった人たちが、江戸時代後期にいました。賤者考という本を、本居宣長（死刑になった罪人の体を使って、解剖図『解体新書』を書いた、医学者）の親戚の本居内近というひとが出しています。

この資料の中に乞丐（こうがい）中に賤者（せんじゃ）考とあります。

皆さんは『貴賤（きせん）』という言葉を知っていると思いますが、貴い（身分が高い）の反対語で、とるに足りない、下らない、卑しい、という意味の賤しい（いやしい）という意味の言葉です。この時代賤しい身分の人たちとは誰を指すのでしょうか、障害者？障害者という言葉はこの時代にはありません。ここにもあるように、『盲（めしい）、聾（つんぼ）咽啞（おし）無手（てんぼう）』のことです。ここで、言葉に注意して下さい、咽啞（おし）は耳鼻咽喉科という医者がありように、ノドと口のこと、しゃべれないことをさします。聾（つんぼ）というのは、耳は聞こえないけれどしゃべれる人もさします、私達は聾啞といわれますが、聾に当たる人たちです。このふたつがまぜて使われていますね、でも咽啞（おし）は聞くことができても声が出せないひとのことをさします。無手（てんぼう）は、『手が棒のようだ』問いう意味です、昔は『いろり』がありましたね、赤ちゃんの時に過っていろりの中に手をいれてやけどで指が全部くっついて、手を開くことができず、ものをにぎることができなくなった人のこと。『足なえ』は歩くことができない人。『せむし』は背中がこぶのように膨らんでまがった人、その他手足の曲がった人や今でいう『CP』のような人もいたかも知れません。これらの人が、ここでいう賤者（せんじゃ）とよばれる人たちです、私達聾者は昔なら『賤しい人』なんですね（一同苦笑）がっくりですね。

ですから、聾者は乞食をしていました。家の者からも捨てられたこれらの人たちは、みな集められ、寺に住まいました。世間の目にふれぬように小さくなって生活していました。鎌倉の大仏がありますね、あのような仏像のひざ元にたくさんの賤者（せんじゃ）が集まってそこで物乞いをするのです、すると参拝に来た人が、『仏の前だし、良いことをしないといけない』などと思って、小銭をくれるのです。清水寺や坂や西大谷のあたりにはお墓がたくさんありますね、あのあたりは昔賤者の死体がすてられていました、また病気の人が死にかけると家の者があのあたりに捨てていったそうです、亡くなればそこにカラスがきて亡骸をついばんで食べたのです、そこは死人の世界でよりそってくらしていたのです。そこにこの本の男「もとおり おりえん」が話を聞いて見に行ってみようと思って、そこに行ってみたら、だんだん気分が悪くなって「もうたくさんだ、あんな所見てはられない、」と家に帰ったら、ただで拾ってきて大切にしていた花や木があったが、くねく

ねした形が、先ほど見た賤者たちの姿とだぶって、気持ちが悪くなってみんな抜いて捨ててしまったと、この本に書いてあります。

昔平安時代のころから、仏教が日本に広まったころから、賤者は寺に集められました。なぜなら貴賤の『貴』に意味があります。賤しい人たちはさきほどの盲（めしい）、聾（つんぼ）咽唾（おし）無手（てんぼう）などのひとのことでしたが、江戸時代身分が四段階にわかれていたのを知っていると思います。一番上の身分は誰だったでしょう。『僧』です。それよりもっとも上のちいといえは天皇です。寺に賤者を置くことで、貴い者がより貴く立派に見えたのです。もし賤者がいなかったら、比べる物が無いので、さほど寺や仏像を有り難く思わなかったかも知れませんが、賤者を見て『仏の罰を受けると、ああなってしまうぞ』という戒めとして教えていたのです。

中世の人たちはそうだったのです。

今はもっと進んでいて、身障者などを、例えば聾者の私を小学校に招いて講演会をしてもらって、「素晴らしい講演を有難うございました、大矢先生は聾者でありながらすばらしくていらっしゃる、あなたたちも、もっと勉強なさい！」なんていう学校の先生がいてがっかりしちゃいます。

話は違いますが。そうやって、立派なものをより際立たせるため、支配階級がわざわざ賤しい者を貴い物の近くに置いたのです。障害者団体の中には、障害者をひとくりにするのは反対だ、なんていう人もいます。施設にみんな押し込めて生活させるのは反対だという人もいますが、昔はそうだったんです。資料がまだたくさんあったのですが、今日は忘れてしまいました、すみません。京都のお寺に木板に描かれた絵巻物があります。それは豊臣秀吉が大阪で最期を迎えますがまだ生きて大阪に住んでいた時京都に秀吉を加勢した僧達がありました。豊国寺という寺が京都にあります。秀吉が討たれてから江戸幕府が立つ少し前、大阪の残党が京都の豊国寺に集まってきました、表向きは秀吉の法要のためでしたが、武装した人たちでした、その様子を描いた絵巻き物が寺にあり、写真を撮ってきたのですが絵のなかに賤者の様子が描かれています。

この資料の絵にもあるように、足なえの人の乗っている車椅子も今のような立派なものではありません、板の下に小さな車のついたようなものです、それにのって、棒で船を漕ぐようにして進んでいく様子が描かれています。『豊国大明神臨時祭施餓鬼図』とあります。そのころ戦のために満足の食料や着るものが与えられなかったため、多くの賤者が死んであちこちに埋められていましたが、生き残って飢えた賤者がその骸を掘り出して死肉を喰らっている、だから施しが必要だと、絵図には描いてあります。実際に私達聾者がこのようなことはしません、絵図の中には描かれています。中世にはこのような絵がたくさんあります。仏門にはいった若いお坊さんもこれらの絵をみて仏門に励んだものと思われれます。

このような絵図は図書館にもありますし、インターネットのできる方はそちらで調べれば見ることができると思います。聾者は他に『モノ云ワズ』という言い方もされ、いろいろな寺の記録に残っています一部の聾者は除いて、地方から都市部に移ってきて、このような記録に残っている聾者は高い身分の人の権力維持のため選ばれ賤しい身分の階層を意図的に作られたものだと私は考えます。

歴史は流れて今も、施設に入る人の中には、入れっぱなしで家族から大事にされることも無く、電話の一本もなく、捨てられ、そのまま体が弱れば施設の病院に入るしかない人もあちこちにいます。そのような歴史の流れの一つかなあと私は推定します。

いろいろな資料を調べていくうち、『日本福祉大学』の先生に何度か御会いして協力していただきました。先生にお願いして古い文献の古語が読めないのを、現代語に訳していただきたいと手紙を送ってお願いしましたところ、日本福祉大学の大泉先生が出されている本の中からこの資料をいただきました。何かというと今は刑法というのがあって悪いことをすると『刑務所』に入りますが昔は『監獄』といました古い刑法で、監獄例えば北海道の網走刑務所、見たことがありますか、そのような監獄のいくつかの建物の中に、子供専用の監獄があった監獄の一角に教置所（きょうちじょ）といって悪いことをした者を『懲らしめて直す』場所があったとあります。刑法が改正されてこのような所は無くなりましたが、明治時代から長い間ありました。その中に、聾の子供がいたという記録があります。音啞（いんあ）とありますが、この子らが何歳かはわかりませんちいさな子供だと思います。聾児と悪いことをした聴の子供の数が書いてあります。明治16年の時、250人の聾児がいたと記録にあります。今の時代も家庭内暴力など悪いことばかりしている子供をもつ親は、こんなに私達両親にひどいことをする子は懲らしめてやって下さい、刑務所に入れて下さいと思っている人もいるかも知れませんが、私の想像では、富国強兵をうたっていた明治時代はそういう悪いことばかりする子供、厄介者の子供をどんどん集めて監獄に入れてしまったのではないかとと思うのです。盲の子も難聴の子も言葉が通じまでするので良いのですが聾の子供とは話が通じないので、まだそのころは京都、大阪、東京などにやっとう学校が立ちはじめたばかりの頃で、聾教育も普及していませんでしたので、ろう学校のかわりに、監獄に聾児を集めて、集めるといふかこの場合親の方が連れてきて、頼むからここに預かって下さいといってきたと思われまふ。そんなわけでこのような凄惨な数の聾児が監獄に集められました。江戸時代から明治に入ってもずっとこのように虐げられ、聾児の子を育てるのは面倒だから監獄にいれてしまえ、という状態だったのです。監獄の中でのようすはわかりませんし、厳しく教育されてしゃべれるように訓練したのか、手話はわかるのかも私にはわかりません。

京都大学の心理学の先生で、犯罪を犯した少年の指導を専門にされている方に頼んで調べていただきました、資料はありますが大量でお配りできません。資料が欲しい方は千々岩さんにお渡ししますのでコピーして下さい。この資料は横浜の監獄で少年の指導にあたった有馬よろうすけという方の記録です。乙竹岩三（こすげいわぞう）という人が日本中の寺子屋に盲の子が何人いるか聾の子が何人かを調べて『日本庶民教育』本を出して、それから留岡福助（とめおかふくすけ）という人が北海道で知的障害者のための施設を建てた方で、その後も障害児の福祉教育をになった方ですがその方の呼び掛けで、全国の少年の更正にあっている人たちの研究会を開いたそうです。その講演会の様子を、横浜教置所の有馬さんが記録した物です。その講演の中で教置所の教育の中で一番大変なのが聾児だと言っています。教官自身が手話の勉強をするわけでも無くただ大変だと言っているだけだろうと私は思います。京都の古河先生や大阪ろう学校と交流があったかどうかはわかりませんが、記録を読む限りでは、聾児には製造や木工などの職業訓練をしてあ

る程度の技術は身に付けたが、読み書きの方はさっぱりお手あげだったとかいてあります。資料を見る限り、このように聾児が監獄に多く集められていたことは間違い無いと思います。思いますではなく、実際横浜刑務所には聾児がいたとあります。その他広島や名古屋ではどうだったかはわかりません。みなさん自分の地元の刑務所の記録を公開している所があれば、昔の記録の中に出てくると思います。調べていただいたら私に資料をくだされば有り難いです。その後明治の終わりに刑法が変わって、教置所は姿を消しました。教置所がなくなり、そこを出された聾児達はその後どうなったのでしょうか、一部はろう学校ができて、入学し。また一部は家に帰って未修学で家にずっといました。家に帰っていじめられ悔しい思いをして家から逃出した子もいるかも知れません。明治から大戦前には、聾啞の村長でみなに尊ばれ慕われた横尾氏がいたことも頭に入れておいてください。

私の考えは、監獄や精神病院に入院させるのでは無く、読み書きを習って、手話も覚えられて自分の気持ちがちんと伝えられる、そんな施設をたくさん建てるのが大切だと思います。

歴史のなかで聾者はいつも虐げられ、聾者の望みはなかなか聞き入れられず、いつも聴者の意見を先にして聾者の意見は後回しになってきたことがあったかも知れない。家には暖房も無く、寒い朝には凍え死んでしまった聾者もいるかも知れません。人として尊ばれる思いを大切にしながら、ろうあ運動を、聴者と共に進めていくためにも、今日学んだ歴史を頭に入れていただきたいです。

私も物忘れが大変激しくて、70代80代のおばあさんたちに話を聞きに行くのですが、人名の手話は何回聞いてもすぐに忘れてしまうので、その手話はだれのことだったっけ、すみません名前を漢字で書いて下さい、などとやりとりをして、二年間で4冊のほんをだしました。

皆さんも自分達の歩いてきたみちをいつか自分も死ぬ、そのあと後世に残しておくことはとても大事なことだと思います。

◆茨城から来ました佐々木と言います。『京都盲啞保護院』について、詳しくお聞きしたい。

きょうは私の準備不足で、本はありますが、これは私が友人と共著で作ったものです、特に京都の中のあちこちの昔の話を憶えている方に聞き取り調査をした資料がありまして、紹介したいと思ったのですが、資料が見つからなくなりまして、準備できませんでした。すみません。本の中にあります写真、これが『京都盲啞保護院』です。この存在を私は今まで知りませんでした。大正の半ば頃から、昭和7,8年頃までの約20年間、古い病院を借りた建物で、外見は普通の大きな民家のようにです。二条城の南側、忍者のからくり屋敷があるといわれている二条陣屋の近くにあります。見つかった切っ掛けは、京都憩いの村（施設）に入所しているおじいさんおばあさんから、施設はこれが初めて出来た訳では無い、昔は『保護院』があったという話を聞いたからです。私は、『保護』という手話の意味がわかりませんでした、「愛する・場所」とよめるので、まさかラブホテルではないし、なんだろうおかしいなあとおもいましたが、昔の手話で、『保護』ということばが、今の『愛』と同じ手話の形だったのです。20年間ありました。そのころの京都盲啞

学校古河先生の建てた学校がありますね。経営難のため、京都の学校をやめて、古河先生が大阪に移られた後、2代目の院長が学校を経営しながら、近くに保護院を借家で奥さんに世話をさせながら、学校と同じように算数や読み書きや裁縫や木工などを教えていました。職業訓練は年長者が、年下の人に教えていました。また、ろうあ協会の京都部会の事務所、また全国ろうあ協会が国際会議を開いたのと同じような、ろうあ運動成人向けの生涯教育などさまざまな取り組みをしていた事を、施設入所している高齢者たちの話をきっかけに調べる事が出来ました。それが新聞に載ったため、あちこちのろうあ高齢者から、「古い資料をもっています」「新聞を持っています」「そのころの事を知っている人を紹介します」と次々に情報や資料が寄せられて、案内していただいたりして、とうとう写真まで見つかったのです。保護院は20年の後、昭和6、7年ころ、ろう学校在、特に名古屋ろう学校の橋村校長が、ベルの影響で口話教育の波が一気に押し寄せ、京都ろう学校も、口話教育に一生懸命になってしまい、保護院はなおざりにされたのです。そのころ鳥居先生は高齢のため退職されており、次の代にかわり、学校の名前も変わったころに、見捨てられ、数も減っていきました。

そのとき、聾啞協会、同窓会が「それでは困る」ということで学校にかけあいましたが相手にされず。その後10年間はろうあ協会と、同窓会で責任を持って運営しました。だから、日本聾啞協会の京都部会が、国際会議でこの場所を使ったのです。ところが、戦争になって大塚という地主が、「信心深い鳥居先生の頼みで20年間無料で保護院に土地を貸した。鳥居先生が退職されたから、土地を1～2年後に返して欲しい。売ってしまいたい。今はそんなにゆうふくではないので、ただで土地はあげられない。」とろう学校に申し出があり、ろう学校は保護院など頭に無かったので、簡単に返却を認めてしまいました。ろうあ協会と同窓会は困ってしまいました。この場所にろうあセンターを建てたいと夢見ていたからです。ろう学校にお願いしても相手にもしてもらえず、土地返却をとめる事は出来ませんでした。そして保護院はもう続けて行けなくなりました。京都ろうあセンター発行の新聞にこの事をずっと連載で書きました。もし読みたいならセンターにコピーを送って下さいと手紙を出して下さい。

先程、保護院の話をしましたね。その関係で、その頃子供達の扱いに困ったろう学校が、京都ろう学校の近くに、福祉施設を建て、同窓会、聾啞協会、学校の教員が一緒になって進めた歴史がここ京都にはあるのです。聾者を差別するのでは無く、一緒になって手を組んで、仲良く、これが大正デモクラシーの時代です。京都には三島というろうあの先生が一生懸命がんばって活動していた頃です。そのころ東京では、小石川に日本ろうあセンターがありましたが、すぐに潰れてしまいました。戦争の前にはありました。京都をモデルに作ったのではないかなとおもいます。そういった意味で戦前ろうあ活動を続けて来たことから京都盲啞保護院は大変意味のある場所です。

講演を終わります。

(記録：内田博幸)